

江藤 淳

漱石とアーサー王傳説

—『薙露行』の比較文學的研究—

東京大學出版會

著者略歴

江藤 淳 (江頭 淳夫)

- 1932年 生まれる
1957年 慶応義塾大学文学部英文学科卒業
現在 東京工業大学教授 (比較文学・比較文化)
現住所 東京都新宿区市谷左内町 32 市谷台グランドマ
ンション 5-C・E (〒162)
主要著書 漱石とその時代 I・II (新潮社・1970)
決定版夏目漱石 (新潮社・1974) 他

漱石とアーサー王傳説

1975年9月25日 初版



© 著者 江藤 淳

発行者 加藤 一郎

発行所 財団法人 東京大学出版会

113 東京都文京区本郷 東大構内 電話 (811)8814・振替東京59964

精興社印刷・複製本

3095-80426-5149

父
上
に

漱石とアーサー王傳説
目次

序説……………一

一 時代の背景と表題の問題……………九

二 本文校訂……………三

三 『漾虚集』の問題……………六
——文學と視覚藝術との相關關係を中心として——

四 留學以前の漱石とアーサー王傳説……………五

五 マロリーと漱石……………一〇六
——一九〇〇年刊マクミラン版『アーサーの死』
に見られる漱石の書入れを中心として——

六 戯曲『キング・アーサー』と漱石……………一〇七
——バーンリッジ・ジョーンズと漱石——

七 漱石と英國世紀末藝術(Ⅰ)……………一七六
——一八九三年刊デント版『アーサーの死』におけるピアズレイ
の挿繪および雜誌『ステューディオ』を中心として——

八 漱石と英國世紀末藝術(Ⅱ) 101

——一八五七年刊モクソン版『テニソン詩集』のためのホルマ
ン・ハントとD・G・ロゼツテイの木版畫を中心として——

九 テニソンと漱石(Ⅰ) 113

——『ランズロットとエレイン』と
『シャロットの女』を中心として——

十 テニソンと漱石(Ⅱ) 115

——『シャロットの女』の問題——

十一 『薙露行』の構成と主題 117

十二 『薙露行』の意味するもの 121

——漱石の内的經驗と文體——

参考文献目録 123

あとがき 126

序 説

漱石夏目金之助が、二年有餘にわたる英國留學から歸朝したのは、明治三十六年（一九〇三）一月二十三日である。⁽¹⁾

その後、約二年にして、滯英中以來の強度の神經症に悩んでいた漱石は、ふとしたきっかけから創作の筆を執るようになり、明治三十八年（一九〇五）一月以降「ホトトギス」に連載された『吾輩は猫である』によって、一躍江湖に文名を高めることになった。⁽²⁾

そのかたわら、漱石は、『倫敦塔』、『カーライル博物館』、『幻影の盾』、『琴のそら音』、『一夜』、『薤露行』、『趣味の遺傳』の七つの短篇を書き、さらに加えて『坊つちやん』⁽³⁾を書いた。まことに、明治三十七年（一九〇四）暮から明治三十九年（一九〇六）半ばにかけての約一ヶ年半は、漱石の創作力が最初の奔出を示した時期だといふことができる。⁽⁴⁾この間、彼は、東京帝國大學文科大學講師と第一高等學校講師を兼任し、また同時に明治大學高等豫科文科講師として出講してもいた。⁽⁵⁾

ところで、前掲の七つの短篇は、ほどなく作品集『漾虛集』に收められた。題名の『漾虛集』は、作者の書齋「漾虛碧堂」に因んでいる。そして「漾虛碧堂」の名は、宋の禪僧雪竇重顯^{せつとうじゆうけん}の詩句、

春山疊ハルヤマノカミニ亂青ミヤドリ。

春水漾ハルミヅノカミニ 虛碧ミヤカド。

寥寥シラシラ天地間。

獨立シタムノ望何極。

に由來(6)しているという。

この短篇集が、東京市日本橋區通一丁目大倉書店・同京橋區銀座二丁目服部書店から刊行されたのは、明治三十九年（一九〇六）五月十八日である。⁽⁷⁾ 同じ大倉書店から上梓された『吾輩は猫である』上篇（明治三十八年・一九〇五・十月刊）につづいて、漱石の二冊目の著書である。

『漾虛集』の諸作に描かれた世界が、『吾輩は猫である』の諷刺的諧謔の世界と相呼應し、表裏一體をなすものであることについては、夙に舊著『夏目漱石』⁽⁸⁾のなかで指摘したことがある。⁽⁹⁾ つまり、それは、『吾輩は猫である』の世界のいわば「低音部」をなすものであり、『吾輩は猫である』の社會諷刺に對して、作者の内面にうがたれた實存的深淵の表現になり得ているからである。

その意味で、『漾虛集』の諸作が、漱石の全作品のなかに占める位置は、重視されなければならない。それは、『文鳥』（明治四十一年・一九〇八）、『夢十夜』（同上）などとともに、彼の他の作品群といわば垂直に交叉している。そして、それらの上に長く印象的な影を投じているのである。⁽¹⁰⁾

一方、留學體驗という側面から『漾虛集』の諸短篇を検討してみると、彼の英國體驗を直接・間接に反映している作品は、四篇を数える。すなわち『倫敦塔』、『カーライル博物館』、『幻影の盾』、および『薤露行』がそれである。そして、このうち前二者が、作者の日常的體驗を手がかりにして構成されているのに對して、後の二篇は、むしろ文學的・審美的體驗から發想されているという相違が認められる。

つまり、その意味で、前二者はより現實的であり、後の二篇はより幻想的である。しかしながら、ここで現實的といい、幻想的というのは、もとよりいささかもそこに表現されている作者の內的體驗の深淺を意味しはしない。現實的敘述によっていくらかでも淺薄な體驗を語ることができるし、逆に幻想を展開することによってもっとも内奥に秘められた體驗を語ることができるからである。

また、同様に、作家の留學體驗を、どのような場所に住み、誰と接觸したかというような、單なる日常的體驗に限定することもできない。日常的體驗と同等、あるいはそれ以上の比重で、彼が留學地ではじめて接することのできた音楽、演劇、造形美術などの意味が評價・計量されなければならない。

書物のあたえる經驗が重要であることは、いうまでもない。特に、かつて讀んだ書物を留學地で讀み直すことによって、作家が獲得するにいたる新しい理解と展望とは、重視されなければならない。このことは、おそらく外國語を二六時中耳で聽くことができるという言語體驗と、密接に結びついている。音が附與する意味の陰翳と、日常の言語體驗のなかでふるい分けられて行く言葉の重味の輕重の序列とが、同じ書物にまったく新しい光を投げかけることがある。その光の下で、作家は、同一の書物を讀みながら、以前には汲みとることのできなかった深くなまなましい意味を汲みとることができるのである。

このように考えるとき、われわれは、留學體驗を反映していると考えられる四つの作品のうちで、『幻影の盾』と『薙露行』の持つ意味を、やや正確に把握することができるように思われる。つまり、この二作は、『倫敦塔』や『カーライル博物館』にくらべてより内密な作品であり、そこに作家の内的體驗の諸相がより渾然と綜合された作品である。この内的體驗は、かならずしも留學體驗の範圍内には限定し得ぬものかも知れない。留學體驗によって喚び起された作家の生の根源にかかわる經驗があるいはこれらの作品に語られているかも知れない。

そして、さらにこの二作のうちで、特に『薙露行』は、比較文學的見地から注目にあたいする作品である。なぜなら、漱石は、その内的體驗を語るにあたって、ここで歴然とアーサー王傳説の枠組を用いているからである。⁽¹¹⁾『幻影の盾』でも、彼は時代を「アーサー大王の御代」に設定し、「所謂『愛の廳』の憲法」によって規定された宮廷風戀愛を描こうとしているが、その典據はかならずしもアーサー王傳説のみには限定しがたく、『オシアン』や『ニーベルンゲンの歌』が斷片的に投影しているように思われる。⁽¹²⁾私の知見の及ぶかぎり、明治以來今日の日本の近代小説のなかで、直接アーサー王傳説に取材した作品は、『薙露行』一篇のほかには存在しないのである。⁽¹³⁾

ケルト起源のこの傳説が、十八世紀末の英國に發し、十九世紀にかけてヨーロッパ全土を洗ったロマン主義の波の東漸につれて、⁽¹⁴⁾ついに二十世紀初頭の極東の島帝國に及び、當時の代表的作家の短篇小説に結實したという事實は、それ自體記録されるべき文學的事件である。このことは、おそらく、明治期における西歐文化の受容が、今日の想像を絶するほど深いものであり得たということの、一つの例證であると考えられる。

この影響關係は、單に西歐から日本への一方的な流れだったわけではない。のちに詳述するが、文體にあらわ

れた美意識の問題を考えに入れるとき、日本から西歐にもたらされ、さらに西歐から日本に逆輸入されるという循環的影響の側面も、また看過すことのできない一面であるように思われる。

だが、それにしても、なぜ漱石は、アーサー王傳説のなかから、ほかならぬランスロットとグウィネヴィアの戀の物語を選択し、しかもこれに對して『薔露行』という謎めいた表題をあたえたのであろうか？ この選擇には、かならず作者の内面に深く秘められた個人的動機が作用しているはずである。さらにまたそこには、それまでの和漢の文學の素養を前提とし、さらに英文學研究の蓄積を加えて漱石が留學中に結實させた、日常的・文學的・審美的な體驗の總和が反映してもいるはずである。

私は、以下の各章において、それら個々の問題の輪郭をあたうかぎり明らかにすると同時に、もしでき得ればそれらの問題相互間の關係をも明確にしたいと願っている。

(1) 第五高等學校教授夏目金之助が、『英語研究ノ爲メ滿二年間英國へ留學ヲ命ズ』という辭令を手交されたのは、明治三十三年（一九〇〇）六月十七日であった。夏目一家は七月下旬に上京し、漱石は同年九月八日横濱を出航したドイツ・ロイド社の汽船ブロイセン號に搭乗して渡英した。ロンドン到着は同年十月二十八日である。

以後二年一ヶ月餘を経て、漱石は明治三十五年（一九〇二）十二月五日、ロンドンのアルバート・ドックを解纜した日本郵船會社の貨客船博多丸の客となり、歸朝の途に着いた。博多丸は翌明治三十六年（一九〇三）一月二十二日夜神戸に入港、漱石ら乗客は翌二十三日上陸を許された。

なお、漱石の留學については、江藤淳『漱石とその時代・II』（新潮社・昭45）三八―二二四頁参照。

(2) 『吾輩は猫である』は、當初一回だけの短篇として書かれ、連載を意圖したものではなかったが、好評のために「ホトトギス」の主宰者高濱虛子の勧めで連載されるようになった。すなわち、第一回が「ホトトギス」明治三十八年（一九

○五) 一月號に掲載されたあと、第二回は二月號、第三回は四月號、第四回は六月號、第五回は七月號、第六回は十月號、第七回と第八回は明治三十九年(一九〇六)一月號に同時掲載され、以後第九回が同年三月號、第十回が四月號、第十一回が八月號に掲載されて完結した。

(3) 以上の作品の發表年月日及び發表誌は次の通りである。

『倫敦塔』明38・1・10「帝國文學」

但しこの作品には、作者自身の手で、末尾に(三十七年十二月二十日)という日附が記されている。『吾輩は猫である』

第一回の直後に書かれたと推定されるのが定説である。

『カーライル博物館』明38・1・15「學鏡」

『幻影の盾』明38・4・1「ホトトギス」

『琴のそら音』明38・5・1「七人」

『一夜』明38・9・1「中央公論」

『薤露行』明38・11・1「中央公論」

『趣味の遺傳』明39・1・10「帝國文學」

『坊つちやん』明39・4・1「ホトトギス」

(4) 私見によれば、漱石の最初の創作力の奔出は、『坊つちやん』執筆のときに頂點に達し、『吾輩は猫である』完結とも一段落したものと思われる。

(5) 明治大學廣報課歴史編纂資料室編『成立期明治大學關係者略傳』(歴史編纂資料室報告第六集、昭49・3・31)一四頁に、「夏目金之助(漱石) m.37・10・文學士・文學博士・高等豫科、文科講師、英語(以下略)」とある。

(6) 明治二十九年(一八九六)十一月十五日付正岡常規(子規)宛の漱石の書簡に、「小生近頃藏書の石印一牧を刻して貰ひたり章曰漾虛碧堂圖書と漾虛碧堂とは虚子と碧梧桐を合した様な堂號なれど是は春山疊亂青春水漾虛碧と申す句より取りたるものに候」という文面が見える。

また雪竇重顯は、百則の公案を擇んで、韻語を以てその奥秘を頌出した『雪竇頌古』の撰者。佛果圓悟撰の有名な『碧巖錄』は、これにもとづいた評釋書である。

(7) 『淡慮集』は賣行き良好だったと見えて、明治三十九年(一九〇六)五月十八日に初版が發行されたのち、五月二十日には再版が發行され、翌明治四十年(一九〇七)三月十日には訂正三版が發行されている。

(8) 江藤淳『夏目漱石』(初版、東京ライフ社・作家論シリーズ、昭31)以下諸版があるが、本論中の引用等はすべて『決定版夏目漱石』(新潮社・昭49)に據る。

(9) 上掲書二七—二九頁。

(10) 上掲書三〇—三一頁。

(11) 『蕪露行』の前書で、作者は「マロリーのアーサー物語」に據った旨を明言し、「テニスのアイザルス」については、讀み返すと「冥々のうちに真似がしたくなるからやめた」といつている。

(12) 板垣直子『漱石文學の背景』(鱒書房・昭31)七三—八一頁。また小宮豊隆『短篇小説集』解説——『漱石全集』第二卷(岩波書店・昭41所收)八四三—八四九頁。

(13) 管見の限りでは、今日までに單行本として刊行されているアーサー王傳説の翻譯・抄譯等は次の通りで、この傳説にもとづく創作は一篇もない。

(1) マロリー作・課外讀物刊行會譯『アーサー王物語』(課外讀物刊行會・大14)

(2) 中島孤島編『神話傳説大系』(近代社、昭4)

(3) マロリー原作・白川渥『アーサー王物語』(講談社・昭27)

(4) 厨川文夫・圭子譯『アーサー王の死—Morte d'Arthur (1485)』(筑摩書房・昭41)

兒童向け圖書におけるアーサー王傳説は、次の通り。

(1) 木下雄三編『アーサー王騎士物語』(金の星社・昭2)

(2) マロリー原作・松村達雄譯『アーサー物語』(創元社・昭28—31)

(3) トマス・マロリー原作・大宮杉文『アーサー王ものがたり』(日本書房・昭31、新版・昭38)

(4) R・L・グリーン編・厨川文夫譯『アーサー王物語』(岩波書店・昭32)

(5) マロリー原作・本間久雄譯『アーサー王物語』(講談社・昭36)

(6) 柴田純『アーサー王物語(漫畫)』(曙出版・昭36)

(7) マロリー作・中川正文譯『アーサー王物語』（講談社・昭38）

(8) シドニー・ラニ・石井正之助譯『アーサー王物語——アーサー王と圓卓の騎士』（福音館書店・昭43）

(9) 水谷まさる『アーサー王と十二人の騎士』（童話春秋社・昭24）

その他の研究文獻等については、のちに本論中で逐次言及する。

- (14) Roger Sherman Loomis: *Arthurian Literature in the Middle Ages—A Collaborative History*, Oxford, 1959. 以下
れば、中世ヨーロッパにおけるアーサー王傳説のテクストの傳播狀況は、ケルト語、ラテン語をはじめとして、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語から、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、スカンディナヴィア語に及んでいる。しかし、この分布圖は、十九世紀末まで正確にヨーロッパ世界の域内にとどまっています、この文化圏を一步も越えていない。

1 時代的背景と表題の問題

一 時代的背景と表題の問題

『薙露行』がはじめて發表されたのは、「中央公論」明治三十八年（一九〇五）十一月號の誌上である。

この號は、たまたま日露戰爭に平和をもたらししたポーツマス條約調印⁽¹⁾の直後のことでもあり、同誌の二百號記念にあたってもいたので、「公論」欄、「文藝」欄ともに一流の執筆者をそろえ、充實した編集ぶりを示している。いま、因みに「公論」欄の目次を紹介すれば、「社論」として『平和克復を祝す・新なる日英同盟』が巻頭に掲げられ⁽²⁾、以下に次のような顔ぶれが並んでいる。

男女學生交際論	安部磯雄
戦後の教育	文學博士 上田萬年
暗示の社會に及ぼす影響	文學士 福來友吉
恒産と恒心	法學博士 中村進午
和戦利害	山路愛山
戦後經營としての教育	法學博士 高田早苗

軍隊歡迎に關する注意

山根正次

露獨兩帝會合の真相

福本日南

これに對して、「文藝」欄を一瞥すると、そこに名を連ねているのは次のような人々である。

付焼刃（小説）

幸田露伴

女客（小説）

泉鏡花

岸の灯（小説）

中村春雨⁽³⁾

薙露行（小説）

夏目漱石

バイロン（新體詩）

土井晚翠

詩歌二章（新體詩）

薄田泣菫

ある夜

兒玉花⁽⁴⁾外

このほかに尾上柴舟選の「和歌」と大谷繞石選の「俳句」があり、さらに「文藝時觀」として登張竹風の『東西同調』が掲載されている。

漱石の作品が「中央公論」に載ったのは、これが最初ではなく、二ヶ月前の同年九月號には『一夜』が掲載されているが、右の目次を見れば、露伴、鏡花の兩大家と並んで、漱石がすでにして一流作家の處遇を受けていた